雲の墓標
春の城

阿川弘之自選作品——I

新潮社版

阿川弘之自選作品

I

© Hiroyuki Agawa, Printed in Japan, 1977.

雲の墓標・春の城

昭和五十二年九月二十日　印刷
昭和五十二年九月二十五日　発行

著　者　阿川弘之（あがわひろゆき）

発行者　佐藤亮一

発行所　株式会社　新潮社
郵便番号一六二　東京都新宿区矢来町七一
電話　業務〇三（二六六）五一一一
編集〇三（二六六）五四一一　振替東京四―八〇八

印刷所　二光印刷株式会社

製本所　新宿加藤製本

定価二七〇〇円

乱丁・落丁本は，御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

雲の墓標 7
春の城 131
年年歳歳 301
霊三題 317
巣立ち 325
修介 337
修介の年末 359
作品後記 377
初出と初収録 386

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

阿川弘之自選作品 I

雲の墓標・春の城　他

雲の墓標

大竹海兵団

昭和十八年十二月十二日

今日は入団後はじめての日曜日で、日課は身の廻り整理。わづかに曇如の心を得て日記をつけはじめる。

一昨日午前十一時五十分大竹駅下車、海兵団に到着して、午後身体検査。合格。「B」。飛行適を申しわたされ、自分の進むべき道はすでに定まつた。学生服を脱いで、ジョンビラと称する水兵服を着、かぶりにくい水兵帽を頭にいただき、純白の作業衣も支給された。夜ははじめてハンモックを吊ることを教へられ、衣服をたたんで枕にすることをおぼえ、また初めて海軍の夕食を食つた。軍隊で寝た最初の夜あけは寒かつた。

四日まへの晩、大勢の肉親知友に送られて、どつたがへす大阪駅頭をたつて来たことは、すでに半年も一年も、あるいは三年もまへのことのやうに、双眼鏡を逆にのぞいたやうに、はるかに遠く感ぜられてならない。海軍の生活が地獄であるか極楽であるか、未だ自分にはわからないが、分隊長から「娑婆」といふ言葉を聞かされた時には、自分がいま、住み馴れた自分の天地から、はつきり疎隔した別の世界に移つて来たことを、強く感じさせられた。もとよりそれは覚悟のまへであるが、自分の心は、積極的にすべてに打ち向つて行かうとして四肢にみなぎる勇気をおぼえて猛烈にふくれ上るかと思ふと、又、奈落へ突きおとされるやうな淋しさと焦躁とで、風船のやうに萎んでしまふ。のこして来た学業への未練、父母への思慕、多くのなつかしい人々への気持、それが十重二十重に自分にからみつき、自分を幾つにも引き裂くのである。しかし、自分たちにはもはや、なにものかを選ぶといふことは出来ない。定められた運命の下に、自分を鍛へることだけが、われわれに残された道だ。

海軍では、バケツがチン・ケースで、雑巾が内舷マッチで、盥はオスタップで、風呂はバスで、僕、君、ネ、殿、厳禁。あやまつて口に出せば、教班長から牛殺しといふ額をこづく刑罰を一つづつもらふ。如何なる些細なことも、此のあたらしい社会の言葉と秩序とにしたがつて、自分を

習熟させ成長させてゆかねばならぬ。

ただ、此の海兵団ではわれわれ学徒出身兵は、それぞれ出身学校別に分隊が分けられてゐて、早稲田の分隊、東大の分隊、中央大学の分隊、広島高師の分隊、そして自分ら京都大学の分隊といふ風で、今もかうして日記を書きながら周囲を見ると、藤倉は浮かぬ顔をして仁丹を嚙んでゐる、坂井は葉書を書いてゐる、鹿島もどこかにゐる筈で、これは自分の倖せである。

十一月の末、最後の万葉集演習がをはつて、夕ぐれまでグラウンドでベースボールをしたあと、みんなで図書館裏の大きな槲の木の下に坐つてしやべりあつた時、鹿島が詠んだ、「真幸くて逢はむ日あれや荒槲の下に別れし君にも君にも」といふ歌を、自分は好きで心にとどめてゐるが、其の仲間が半数までここにかうやつて共にくらしてゐることは、自分を非常に勇気づけてくれる。

戦局は日本に有利な状況ではない。しかし米国にとつても必ずしも有利な状況ではあるまい。アメリカの学生たちも、あるいはシェークスピアやホイットマンの研究をなげうつて、戦列に伍して来てゐるであらう。これからの戦ひは、ある意味で彼らとわれわれとの戦ひであるかもしれない。あらゆる妄念を心の底に沈めて、雄々しくなることに努めねばならない。明月曜日は正式の入団式で、呉鎮守府司令長官の巡視がある。自分たちの小さな心の動きをすべて圧伏する巨大な車輪の廻転によつて、一歩々々大きな組織の中へ溶けこんでゆくのだ。

十二月十五日

午前中、分隊長湯原大尉の精神講話の時間に、藤倉が新聞を読んでゐてみつかつた。分隊長の話は、海軍の精神としてスマートネスといふことを説いたものであつた。これは洒落気のことではない。敏速にやはらかく、軽く、しかし粗暴にならぬやうに、静かに。身のこなしにも頭の廻転にも、これなくては、船乗り飛行機乗りとして海軍のお役にはたたないといふ話の途中で、大喝一声、

「誰だ、うつむいて新聞を読んでをるのは。起て」と。一同どうなることかと心安らかでなかつたが、何の新聞だとたづねられて、藤倉が読書新聞だといふと、分隊長はよくわからなかつたらしく、訊きかへした。藤倉はやや反抗の語気で、

「読書新聞の芭蕉のことを書いたものを読んでをりました。これを書かれたのは、わたくしの恩師であります。分隊長の今話されてをることは、芭蕉の申す軽みといふ心に通じるものであると思ひます」と叫ぶやうに答へる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「新聞を見ながら、わたしの話がわかつたか」
「ハイ。聞いてをりました」
一同失笑。分隊長は笑はなかつたが、
「よし。新聞たため。以後さういふこと相ならん」といひ、とがめはそれだけで話をつづけた。あの芭蕉の話はO先生が書かれたものだ。自分はなつかしい気がした。しかし湯原大尉に対しても、悪い感じは起らなかつた。
午後、予備学生試験。国語、作文、数学、物理。監督は教班長吉見善太一等兵曹。われわれは此の試験に合格して、当海兵団での教程を了へると、一ヶ月余ののちには、士官の服を着、少尉候補生に準ずる階級をあたへられて、各々の専門の技術の修得を始めることになる。自分は十中八九、土浦航空隊に行くことにならう。吉見一曹はミッドウェー海戦で沈没した航空母艦蒼龍乗組の生きのこりで、海軍生活はすでに十年になるが、われわれは間もなく其の上級者となつて、戦場で相見える日があれば、掌中に此の人たちの生死をにぎつて、其の指揮をとらねばならぬのだ。これを安易に考へるわけにはゆかない。海軍のことを未だ右も左も知らぬ者が、いくらもせぬうちに自分の上官に成りあがると思ふことは、教班長たちにとつて愉快なことではないであらうと察してゐるが、すくなくともうちの吉見教員は「大学の先生になつた」といつて笑ひ、かつ自分の責任を重いものと感じてゐるらしく、われわれに対して無理難題をいひかけるやうなことは全くない。
試験は、国語、作文はなんとでもなるが、数学と物理は、われわれ文科系出身者にとつては如何にも苦手である。オームの法則とか、ヘルムホルツのエネルギー不変の原理とかいふものは、中学生時代に聞いたことのあるやうなかすかな記憶として残つてゐるだけで、みんな頭をなやましてゐた。ところが、予備学生試験に際しても、海軍の慣例で、各分隊各教班の競争意識は非常につよく、教班長としては、まちがつても自分の班から不合格者を出すやうな不名誉はとりたくない。それで監督自身がカンニングをしてあるいてゐる。吉見教員が自分の机の横に立ちどまつて、鉛筆でチョンチョンと叩くので、振りかへると、知らん顔をして行つてしまつた。よく見てみると、自分の数学の例題は一つ答がちがつてゐた。あちらでもこちらでも立ちどまつて、チョンチョンと叩いて歩いてゐる。
夕別科海軍体操。

十二月二十八日
カッター撓漕三回目。約五十回。はた目に整々と美しく、みづからやつてこんな苦しいものはあるまい。しかし頑張

らねばならぬ。

鉄石の意志。清潔整頓。積極進取。実務第一。

だが、正直に書けば、これらの徳目にぴたりと寄りそつて、ちやうど其の反対のものが常に自分の心に顔をのぞかせてゐる。弱気。怠惰。消極現状維持。要領第一。自分は要領第一になれる方ではないが、時に要領よくやらねば、軍隊のなかでは生きてゆけないのではないかと感ずることがある。藤倉は煙草盆の時間に、自分に向つて公然と、「要領だよ、吉野、要領だよ。君は馬鹿正直の方だから言つといてやるが、僕たちは海軍といふ閉ざされた世界の鋳型にはまらなくても、自分たちのやるべきことだけはやれるよ。それだけの自主性が持てないやうなら、なんのために今まで、高等学校や大学で、あんな奔放な生活をして来たのだ？　鋳型にはまつた恰好をしてみせなければ怒るから、そこで必要なのが要領だよ。芥川龍之介は、嘘でしか語れない真実もあるといつた」と。彼は監督者のゐないところでは、今もけつして貴様、俺、お前といふ風な言葉を使はうとしない。そしてわづかな抵抗をたのしんでゐるやうに見える。自分は必ずしも藤倉の意見に賛同はしないが、鹿島や藤倉の言ふことだと、どのやうなことでも一応は率直に聞くことが出来る。われわれ四人の間では、藤倉と鹿島の二人が一番海軍の気分に対して反逆的で、坂井が最も素直だが、気が弱くやや愚痴が多く、自分は其の中間といふところである。

ここでは玄米食励行で、毎食前高声令達器が、「食事、食事。総員手ヲ洗ヘ。ヨク嚙ンデユックリ食ベヨ。ヨク嚙ンデユックリ食ベヨ」と放送してゐる。軍隊に入つたら飯を早く食はないとひどい目にあふさうだといつて、みんなでたはむれに小川亭で早飯食ひの競争をしたこともあつたが、逆であつた。其のせゐか学徒水兵たちは、みな体質がかはつたやうに大便によく行く。自分も決つて一日三遍、固い糞をたくさんして来る。みじかい休み時間、便所はいつも満員で、行列のあとにつくのがおくれたらやりそこなふ。大便を我慢して陸戦教練をやるのはつらいものだ。特に不動の姿勢の時、下腹が張つて来て、屁が出さうでつらい。夜なかに一度起きて、一回ぶんだけウンコをしておくこと。これも要領の一つか。

昭和十九年一月二日

あたらしい年。最初の岩国行軍。入団後はじめて外界の空気にふれ、鶏の鳴きごゑや、子供が晴れ姿で羽根をついてゐるのや、自転車を持つたほろ酔ひの行商人が道端で立小便をしてゐる巷の正月風景が、すべて眼に耳にしみるや

うに感ぜられた。岩国川は底に白いまるい石のたくさん見える清冽ながれで、錦帯橋の附近は、洛西嵐山の渡月橋あたりの風景によく似てゐてなつかしかつた。夕刻帰隊。

甘いものが食ひたい。ぼたもちへの渇求はすでに二週間におよぶ。海軍に入つて来て、自分は毎日何をいちばん思つてゐるか。気がつくと、常に食ひもののことばかり考へてゐるやうだ。自分は女の身体を識らないためか、性欲はまつたく感じないが、赤い炭火でこんがりと焼いた豆大福が食べたい。小川亭のトンカツがもう一度食べたい。

正月三ヶ日は銀めしである。毎日の玄米食を見馴れた眼に、つぶつぶとした艶と適度のしめりをもつて白く光つてゐる炊きたての白米は、たふとく思はれる。元日は昼食十時。サラダ、かまぼこ、数の子、黒豆、牛肉、水羊羹、つづいてすぐ、菓子二た袋、林檎一、蜜柑四つが出た。ただしこれだけを其の場で一ッ気に食ひ、のこして他の時間に食つてはならないと言ひわたされる。何故だらう？　しかし、事ごとに何故か、といふやうな疑問を持つのは、軍人精神がはひつてゐない証拠であると言はれる。抗弁するものはないが、懐疑の精神が近代科学の生みの親であると、われわれは聞いて来た。そして海軍はなによりも、西欧の近代科学の上に立脚してゐる。陸軍とちがつて、海軍の軍人は、精神主義ばかりでは艦船も航空機も動かないことをよく知つてゐる筈だ。これは矛盾ではないか。

しかし、心底から欲するところ、おのづから多少の道が通ずるもののやうで、ゆうべ釣床の中へ乾柿三箇秘密配給があつた。本日おなじく、味噌煎餅五枚秘密配給。煎餅を音をさせないで食ふのは、至高の技術を要する。世界が二つに割れてかうして戦争をしてゐても、必要となれば、スエーデンの鉄鋼でも米国の機械でも輸入する道はのこつてゐるといふが、自分たちの方でも、外界との道は完全に絶えてゐるわけではない。同班のSは、大竹町の顔役の息子で、海兵団の副長を通じて物資がはひる由で、味噌煎餅はSの恵与である。となりの班にゐる鹿島は、大晦日の夕方、突如高いところより、

「こら。鹿島、鹿島」と天狗のごとき声あり、驚いてゐるうちに、からだを掃除道具入れの棚の上にひつぱり上げられて、石井教班長より、さあ食へといつて、乾柿と茹玉子を二十くらゐ呑みこまされたといふ。鹿島の父君が鹿島の正月を憶つて食べものをたくさん持つて面会に来たが、あはせてもらへず、

「それでは捨てるのも勿体ないから、どうか教班長さんたちであがつて下さい」と色々なものを置いてかへつたのださうだ。ひそかに面会をもとめて来て、あへずにかへつてゐる父兄は相当多いらしく、それらのなかには、教班長を

買収しようとする者もあるらしい。また買収される教班長も多くの中にはゐるらしい。自分はかういふことは好きとはいへないが、食ひ気のまへには精神が妥協的になる。ゆうべの乾柿の秘密配給は、むろん鹿島からのものである。

大晦日にはまた、温習時、ノートに丹念に親子丼とカレーライスと洋菓子の絵を描いてゐた奴がつかまつた。六教班のMである。十二色の色鉛筆で実に克明に描いてあつたが、ビリビリにやぶられて、分隊長から両頰往復二つなぐられた。自分はさいはひ、入団以来未だ一度もなぐられたことがない。

一月七日

昨夜、底びえのする寒さであつたが、今朝は雪。中国の山と瀬戸内海の島々を白くいろどつて、雪はなほ霏々として降つてゐる。天突き体操。かけあし。をはつてカッター。吉見教班長は舷側を叩いて、

「早くやれ。いそげ」と叱つてゐたが、それは乗艇のとき、分隊長のゐるまへだけで、沖へ出ると、「櫂組め」を掛けて、雑談をしてくれる。われわれは雛のやうにたがひにからだをくつつけて煖をとり、手をこすりながら教班長の話を聞く。いつも青黒く見える大きな厳島が薄く化粧をして、雪の降る海の中に横たはつてゐる。カッターの中にも薄く雪がつもつてゐる。港にはドイツの潜水艦が二隻入つてゐるのが見える。

吉見教班長の乗艦蒼龍沈没の時の話を聞く。ミッドウェーのたたかひは、あきらかに日本側の負けいくさであつたと。此のミッドウェー海戦をやまとして、日本の空母はすでに、赤城、加賀、龍驤、蒼龍、飛龍、祥鳳、みな無く、さいきん特空母沖鷹も沈んださうである。沖鷹は日本郵船の新田丸の改装であつた由。正規の航空母艦として現存してゐるものは、わづかに翔鶴、瑞鶴の二隻のみで、これからの戦争は日本にとつて、よほどの難事となるであらう、かならずしも大本営発表のラヂオの報道のやうな景気のよいものではあるまい、実戦に出た者がそれは一番よく知つてゐる、みんなも自分のいのちは、およそ来年の春ごろまでのものと覚悟して、よく気持をさだめておく必要があらうといはれ、それがしみじみとした調子で、一同手をこするのも忘れてシンとして聞き入る。教班長はまた、みんなが間もなく一人前の士官となつて実戦部隊に出てゆくと、自分の責任感から、まじめで熱心な人ほど、部下をしつかり締めてゆかうといふ気持をもつやうになる。しかし事がらの中には、締めても締めなくても、大局にまつたく影響のないやうなこともたくさんあるもので、必要なところは

いくら締めても突きはなしてもなぐつても構はないが、さういふところをよく見とどけて、一寸ゆるめてやり、ある時は見て見ぬふりをするといふことも心得てくれ、なんにも恵まれない若い兵隊にとつてそれがどんなに嬉しいか、みんなが此のわづかな期間の、自分の二等水兵の時の気持を忘れないでやつてくれと。

あとで同班に、あんなことを言ふのは、教班長の下士官根性、来年の春までに死ぬなどといつて、自分の将来のこともしつかり計算してゐると批判する者あり。自分は賛成せず。すでに見越した自分の階級を笠に着て、さういふことを言ふのはをこがましい。無用の自負をもつて、謙遜の気持をうしなへば、きつといつか、無用のトラブルが起るであらう。

つめたくて指がしびれるが、カッターの漕ぎ工合もよほど会得出来て来た。其のほか、発光信号、手旗、結索。結索は、一ツ結ビ、二ツ結ビ、舫ヒ結ビ、腰掛ケ結ビ。一重ツナギ、垣結ビ、引ツナ結ビなどなかなかむづかしい。則の掃除、洗濯。靴下の上手な洗ひ方。段々海軍の生活も身についてくるやうである。われわれの退団は、今月二十五日よりおそくはなるまいとのこと。

夕食に、あつい豆腐汁と、鰯の尾頭つきが出た。よくのつたあぶらに塩気がしみわたつて、うまい。食事当番にて、鰯を一尾、自分の盛り飯の中へかくしこむ奴あり。いくらかくしても、食つてゐるうちに魚の形が出てくるのだが、平然として食つてゐる。これが京大で法律を勉強して来た人間のすることか。自分は彼の所業をさげすみ、且つ憎む。しかし同時に、自分の心はあきらかに其の一尾の鰯を非常に羨ましがつてゐる。どうしてこんなに腹が空くのだらう。

来る十四日に面会がゆるされることが急に決定し、今日謄写版刷りの案内状を出した。土屋文明「万葉紀行」、萩原朔太郎全集、マッチ、メンソレータム、腹痛の薬たのむ。夜、餡餅一箇秘密配給。ハンモックの中で餡餅を食ひながら、父母にあへることをおもひ、幸福を感ずる。

一月十日

京大のO先生、E先生、高等学校のN先生などから、かたまつて便りが来た。休憩時間、鹿島、坂井、藤倉等と煙草盆をかこみ、それぞれもらつた葉書を持ちよつて、久しぶりに万葉のはなし、大和の風物のはなしに花をさかせた。しかし自分は其のとき、他分隊の者のふとした表情から、われわれにとつて日常茶飯のものであつた万葉集についての会話が、他の人たちに妙に衒学的にきこえぬやう注意す

る必要を感じた。学徒出身の水兵ばかりのなかで、なほしかり。今後実戦部隊に配属されるやうになつて、本職の軍人や下士官兵にまじつて、いたづらな学問への郷愁をかたることは、つとめて避けなくてはならない。世界に平和な日がおとづれるまで、自分のいのちが永らへることをゆるされた時の用意に、それはひそかに自分らだけで心の底にたくはへておくべきものだ。

しかし、さうはいつても、話はやはりたのしかつた。大和三山や二上山や山辺の道や布留川のながれや、昨年の冬、万葉旅行でみんなで歩いた土地のことを言ひあふだけでも、自分の心は此の上もなくなぐさめられた。名張の町の旅宿で掘炬燵にあたつて、カルタであそんでゐると、裏の山から鵯がよく、グミの赤い実をねらひにおりて来た。自分はまた、機会を得て、二月堂のお水取りに内陣で夜をあかした時のことも思ひ出す。「水取りやこもりの僧の沓の音」。此の寒があけると、また奈良のお水取りがはじまるわけだ。薄氷を踏み割ると、泥水がやぶれた靴のなかへじとじとと浸みこんで来た其の感触までが、ありありと感ぜられる。大和の風物、そして万葉集は、なんといつてもわれわれが生涯をかけた心の拠りどころであつた。が、今となつては、それももはや単なる美しい情調、なつかしい憶ひ出と化したことを忘れてはならない。今はただそれをなつかしんでゐる時ではなく、大伴旅人が太宰府で「沫雪のほどろほどろに降りしけば」と歌つた、其の僻遠の地での境涯を、たたかひの中でこれからぢかにたどるのである。一応学問もすべて捨て去つて、海軍軍人としての自分に徹し切ること。其のことが、もしいのちあつた場合、自分が万葉の歌を見る眼をかならず深くしてくれる。それを信じることだ。

N先生からの便りでは、N先生は二月九日まで、東京都北多摩郡小金井町の教学錬成所にはひつて、「みそぎ」その他の錬成に参加される由。しかしかういふことは如何にかんがへるべきか。各高校から教授が一名づつ参加してゐるさうだが、これははたして新しい時代の息吹きを感じさせるやうなことか。たしかに必要なことか、あるいは時代に逆行する無用の愚行であるか。自分の気持としては、学園にのこつた先生たちや学友が、本業をなげうつて「みそぎ」にうつつを抜かしたりするより、自分たちの分まで其のつもりになつて、平静に従来通りの研究をつづけてもらふことの方が望ましいやうな気がする。大学の研究室も灯の消えたやうに淋しくなつたと。伏見の輜重隊、奈良の高畑の聯隊、鹿児島、東京、満洲などの各地から、陸軍にはひつた者の便りがぽつぽつ教室にとどいて来てゐるさうである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com